

愛媛大学医学部 同窓会会報

2018 NOVEMBER No.34

発行日／平成30年11月1日
編集発行人／薬師神 芳洋
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL(089)960-5989
印刷／太陽印刷株式会社
TEL(089)932-2881



表紙紹介

愛媛大学医学部

グラウンドからの風景

愛媛大学医学部同窓会撮影

CONTENTS

副会長挨拶	2
新任教授からのメッセージ	3
医学部医学科人事異動	4
退職教授からのメッセージ	5
活躍する卒業生	7
愛媛大学医学部同窓会会則	8
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則	9
愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項	9
50周年に向けて 一期生雄志座談会	10
オープンキャンパス開催	13
海外医療研修に参加して	14
医学祭を終えて	16
医学部課外活動(運動部)紹介	17
第34回通常総会報告	18
同窓会報告	19
支部紹介	20
2018年度同窓会役員	21
あとがき	22
愛媛大学医学部 キャンパスマップ	23
お知らせ	24

副会長挨拶



愛媛大学医学部同窓会副会長に就任して

石田 也寸志 (昭和58年卒・5期生)

愛媛県立中央病院小児医療センター長

愛媛大学医学部同窓会会長薬師神先生からのご指名で、2017年度から同窓会副会長に就任した5期生の石田です。私は卒後すぐに愛媛大学小児科医局(松田博教授)に入局し、初期研修の後、4年目から築地の国立がんセンターに臨床レジデントとして3年間国内留学させて頂きました。7年目に医局に帰り、小児科に血液腫瘍グループを創設し、愛媛県では初めて小児造血幹細胞移植も始めました。県内の小児がんのほとんどを紹介してもらえるようになり、ベッドが足りなくなったことから、1998年から2年半愛媛県立中央病院に赴任し、同院でも小児がんの治療ができるようになりました。その後は再度医局に帰り、2008年まで約20年近く愛媛大学医学部で仕事をして参りました。その後聖路加国際病院小児科・臨床疫学センターで仕事をさせていただいた後、2012年に再度愛媛に帰り、現在は愛媛県立中央病院小児医療センターに勤務しています。

愛媛県立中央病院は、県内で最も大きい病院の1つですが、愛媛大学医学部の関連病院の1つとしても重要と思いますので、簡単にこれまでの歴史を紹介します。愛媛県立中央病院は、1945年に日本医療団愛媛病院として持田町に発足しました。1947年1月には三番町に移転(120床)、1948年に県立愛媛病院となりました。1956年に県立中央病院と改称し、1967年には病床400床に増床され、1974年に現在の春日町に新病院完成・移転(18科、600床)しました。1981年救命救急センターの開設(780床)、1990年周産期センターの開設(854床)と増床・発展しました。建物の老朽化のため、2009年から新築工事が始まり、2013年5月に新本院が完成し移転しました。現在は基幹災害拠点病院としての機能強化や高度救命救急センターとしての機能充実(ドクヘリの運用)、県内周産期医療の拠点として「県民の安心の拠り所となる病院であること」を理念として診療しています。

当院は設立当初から、多くの大学医学部出身者が混在しながら運用されてきましたが、現在は勤務医師の54% (252人中137人)、管理職医師(センター長以上)の68% (19人中13人)が愛媛大学医学部出身者です。今後も他大学出身者と密接な協力関係を保ちながら、Win-Winの関係を維持していきたいと考えていますが、愛媛大学医学部同窓会の皆様のご支援は不可欠です。何卒よろしくお願ひします。

私は2008年に愛媛大学を離れて既に10年になりますが、独法化後の教室・講座名の変更、寄付講座の増加、教授陣の充実・増加、大学内の改築や附属病院の施設の整備など、大学を訪れると隔世の感があります。最近小児科医局の用事や同窓会会合などで愛媛大学医学部を訪れても迷ってしまうこともあります。一度同窓会の皆様も、発展を続ける愛媛大学医学部に何かの折りに足をお運び頂けると幸いです。

最後になりますが、もうすぐ愛媛大学医学部開学50周年を迎えるということで、同窓会役員の間でもどのようなイベントを企画するのか議論が始まっており、同窓会会員の皆様から様々なアイデアを募集しているところです。是非ご連絡下さい。



茂木 正樹

(愛媛大学大学院医学系研究科 薬理学 教授)

愛媛大学同窓会会員の皆様、平成29年12月1日より薬理学教授を拝命いたしました茂木正樹と申します。どうぞよろしくお申し上げます。私は平成6年に大阪大学医学部を卒業後、大阪大学老年内科に入局。平成13年よりボストン大学に留学し、幹細胞における細胞シグナルについての研究を行った後、平成15年より愛媛大学老年内科の助手として愛媛大学に赴任して、爾来15年、愛媛の地で臨床と研究に従事させていただきました。その中で、認知症や神経難病への新しい治療法開発の必要性を感じ、平成16年より医化学心臓血管生物学の堀内正嗣教授のもとで生活習慣病と神経疾患、主に認知症に関する基礎研究を実践して参りました。

愛媛大学薬理学講座は1973年の医学部開部以来、小川暢也初代教授、前山一隆前教授が主宰され、私が3代目になる教室です。これまで小川先生は時間生物学などに着目した神経薬理の研究を、前山先生はヒスタミンなどに着目したアレルギー疾患の研究を進めて、愛媛大学の薬理学教室を特徴ある教室に発展して来られました。私は老年内科出身であることから、細胞老化のメカニズムの検討や、加齢細胞や加齢動物における薬物代謝の検討などを通して、生活習慣病や老化関連疾患（認知症・サルコペニアなど）に対する新しい薬物スクリーニング法の開発や、個別性の高い高齢者の薬剤効果を評価する老年薬理学の構築を目指し、オリジナリティに富んだ研究と教室運営を行って参りたいと考えております。

また、研究と共に、薬理学教育も重要であると考えます。薬理学は基礎と臨床の懸け橋になる分野であり、医師としての薬理学の基礎知識を身に付け、病態に適切な薬物治療を行える力を育て、さらには現状を打破する創薬にチャレンジしたいと思う研究マインドを持つ学生を育成して行きたいと考えています。

最後になりましたが、大学の基礎講座の体力を保っていくためには基礎講座同士での有機的なコラボレーションが必要であり、さらに臨床講座と連携して、臨床で有益となるトランスレーショナルな研究を進めて行くことが大切と考えます。そのためには、愛媛大学同窓会会員の先生方からの御支援なくしては成り立たないものだと考えます。諸先生方からの、一層のご指導・ご鞭撻を賜りたく存じます。何卒よろしくお申し上げます。



竹中 克斗

(愛媛大学大学院医学系研究科 血液・免疫・感染症内科学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、平成30年5月16日付で、血液・免疫・感染症内科（第一内科）の教授を拝命しました竹中克斗と申します。平成3年に九州大学医学部を卒業し、同大学第一内科に入局し、総合内科医、血液専門医として研鑽を積んで参りました。初期研修は九州大学病院と松山赤十字病院内科で研修をさせて頂きましたので、その際に1年間松山市に在住し、九州大学ご出身の先生方だけでなく、多くの愛媛大学ご出身の先生方にも大変お世話になりました。その後、専門領域として血液内科を選択し、同時に造血幹細胞についての基礎研究を行い、学位取得後に、平成9年からは岡山大学第二内科で勤務する機会を頂きました。同大学では、成人では国内初となる同種末梢血幹細胞移植法の確立に携わらせて頂きました。平成12年から、カナダ・オンタリオ州のオンタリオがんセンターに留学する機会を頂き、白血病幹細胞の遺伝子発現解析や、がん幹細胞アッセイのための異種移植系の開発を行い、多くの発表の機会を頂きました。また、その時期の研究は、現在の研究に基盤となっています。平成17年に帰国後は、九州大学病院血液・腫瘍・心血管内科にて血液・腫瘍分野の臨床・研究・教育に従事してまいりました。血液領域だけではなく、消化器がんの化学療法も経験し、がん薬物療法専門医を取得、病棟医長や研究グループの立ち上げ、日本血液学会や日本造血細胞移植学会にて大規模多施設観察研究の立ち上げやガイドラインの作成に携わってきました。

私の専門領域は、血液疾患であり、白血病、リンパ腫、骨髄腫、骨髄増殖性腫瘍などの悪性疾患、再生不良性貧血などの骨髄不全症候群、血小板・凝固系疾患などの治療を経験し、とくに、自己および同種造血幹細胞移植を積極的に経験して参りました。当教室は、内科疾患の中で、血液内科、腫瘍内科、免疫膠原病内科、感染症内科を担当しますが、疾患の特性上、特定の臓器に限局しない全身性疾患であり、「どう診断の確定に迫っていくか」という一連の流れが当科の魅力であり、診断後もトータルケアできる能力が求められる領域です。また、診療科横断的な役割などを通じて、内科系領域全般についての広い知識と診療技術と、高い専門性を両立できる内科医の育成を目指しています。診療だけでなく、基礎系教室との連携も行いながら、病態の解明や、新しい治療標的の発見、その標的に対する新規治療法の開発を目指していくつもりです。また、愛媛大学の大切な役割の一つに愛媛県下の医療の充実が挙げられます。現在、多くの県下医療機関において当科出身の医師が地域医療に貢献させて頂いております。当教室の診療領域は、どの分野を選択しても、「感染症」に精通しておくことが重要で、感染管理を含めて多くの医療機関で貢献できると考えています。この領域の第一線で活躍できる人材を輩出していきたいと思っています。今後も引き続き、各医療機関と密接な連携を図り、愛媛の医療の充実にも努めて参りますので、同窓の諸先生方にはご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお申し上げます。



山口 修

(愛媛大学大学院医学系研究科 循環器・呼吸器・腎高血圧内科学 教授)

このたびご縁を賜り、平成30年4月1日より愛媛大学大学院医学系研究科 循環器・呼吸器・腎高血圧内科学の教授を拝命いたしました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。私は、平成7年に大阪大学医学部を卒業後、大阪大学医学部附属病院、国立大阪病院(現国立病院機構大阪医療センター)、大阪警察病院で臨床研修を行いました。主に虚血性心疾患に対するカテーテル治療に従事すると共に、血管内視鏡を用いた冠動脈病変の研究に取り組みました。

急性冠症候群など様々な心疾患の終末像である心不全の分子機構がほとんど明らかにされていない点に興味を持ち、平成12年に大阪大学大学院に進学しました。堀正二先生(現大阪国際がんセンター名誉総長)、大津欣也先生(現キングス・カレッジ・ロンドン教授)にご指導を賜りました。これまでの研究では、一貫して心筋細胞内現象の分子機構解明により、分子の言葉で心疾患を説明することを目標に研究を行って参りました。特にアポトーシス、ネクローシスなどの心筋細胞死をテーマに研究に取り組みました。また、ノーベル賞受賞により注目を浴びたオートファジーに関する研究にも長く取り組んできました。また臨床面では重症心不全の診療、心臓移植に取り組んで参りました。

最近基礎研究への敬遠が医学を含めた幅広い理系分野で見られています。また、出口を意識した研究や、すぐに応用可能な研究に注目が集まりやすい時代です。これまでを振り返りますと、じっくりと研究に取り組ませて頂ける環境に身を置けたのは私にとって本当に幸運だったと実感しています。これから、学生教育はもちろん、関連病院の皆さんとの緊密な連携によって若い先生を優秀な医師へ育て、地域へ還元していくことが私にとって重大な責務です。リサーチマインドを持った若い医師を育てることが、愛媛の医療を守ることに直結すると信じております。ベッドサイドでもベンチサイドでも、どのような立場にあっても問題点や違いを自ら発見し、それらを解決するための努力を続けていける、そうした医師を一人でも多く育てていきたいと考えております。

着任にあたり私が掲げた教室運営の目標は『みんなで夢を分かちあえる講座』です。それぞれの先生の夢を実現する場として、しっかりと運営してまいりたいと存じます。愛媛大学医学部同窓会の諸先生方には、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。



堀内 正嗣

(愛媛大学大学院医学研究科 分子心血管生物・薬理学 教授)

私の研究歴

1979年に信州大学医学部を卒業、近畿大学医学部附属病院で研修後、学生の時より興味のある基礎医学にじっくり取り組んでみようと思い、大阪大学医学部腫瘍生化学教室大学院に入学しました。当時は、基礎医学を続けるとは、考えておらず、国立大阪病院(現独立行政法人国立病院機構大阪医療センター)、近畿大学附属病院循環器内科で循環器の臨床に携わっておりました。しかし、何か物足りなさを感じていました。当時、分子生物学的手法を取り入れた高血圧研究が米国を中心に行われはじめ、中でもHarvard Medical SchoolのDr Dzauは、組織特異的レニン・アンジオテンシン(RA)系の存在を世界に先駆けて証明するなど、スーパースター的な存在でした。京都で開かれた国際高血圧学会で、彼の講演を初めて聞いて感動し、留学したい旨の手紙を書いたところ、大阪に講演に来る機会があるので面接してくれるとの事、大喜びで彼に会いに行ったのを覚えています。このような経緯でDr Dzauのところへ1989年7月より、留学いたしました。

愛媛大学(当時第一医化学)教授に、1999年2月に着任、アメリカでの研究の延長でRA系を中心とした血管医学研究を進め、約20年経過しました。そして、来年3月に退職の日を迎えます。アメリカとの研究環境の違いに加え、基礎医学教室なので、医学部から直接入学してくる大学院生は全国的にも少なく、着任当初は不安でした。幸いに、愛媛大学農学部、工学部、医学部からは内科、小児科、眼科、産婦人科の大学院の先生方、愛媛大学医学部の姉妹校を中心とした中国からの留学生等、多くの方々に研究に参加して頂く機会と同窓会の諸先生方の暖かいご支援にも恵まれ、充実した研究生活が送れたと自負しています。

古典的RA系阻害を標的とした血圧降下薬が高血圧治療に広く使われています。しかし、近年、RA系の新規構成コンポーネントが次々と発見され、古典的RA系経路に拮抗して作用するRA系保護軸としての作用が注目されてきています。我々の研究室では近年、RA系保護軸活性化による血管保護、認知機能低下予防・改善をめざし、創薬を含めた新規アプローチを目的とした研究を進めてきました。おかげさまで、愛媛大学医学部での研究成果が多くの国際誌に掲載されました。今や、愛媛大学医学部は新設大学ではありません。旧帝大にも決して引けを取らない優秀な先生方と一緒に、実りある研究生活が過ごせたことを、とても感謝しております。本当に、有難うございました。愛媛大学医学部の益々の発展と、同窓会会員の皆様の益々のご多幸を心よりお祈りいたします。



石井 榮一

(愛媛大学大学院医学系研究科 小児科学 教授)

次世代の医療を担う君たちへ

小児科学講座の石井榮一です。この度平成30年度末をもって愛媛大学を退任することになりました。最後の12年間を愛媛大学で仕事をする事ができたこと、心より幸せだったと思います。今、愛媛大学での臨床、研究、教育を振り返り、自分としては、やり切ったという満足感を覚えています。特に本年度はベストティーチャー賞10回受賞の特別表彰をいただき、これで大学人としての人生に区切りをつけることができました。また来年度からは別の病院でしばらく一般診療をやる予定ですので、その節は改めてよろしくお願い申し上げます。そこで最後に次世代を担う学生や若手医師に、医師としての40年間の経験からのメッセージを送りたいと思います。参考になれば幸いです。

- ① **学生時代は基礎力と人間力養成の期間である**：学生時代は勉強をして立派な成績を残すことも大切ですが、じっくりと基礎力を身につけ、スポーツや友人との交流を通じて人間としての厚みを作ってほしいと思います。卒業後の人生で壁にぶつかった時や難しい決断をしなければならぬ時に、それを乗り越える力となることでしょう。また英語力は是非学生時代に身につけてほしいと思います。
- ② **卒業後の専門分野の選択は重要ではない**：優れた人間はどの分野に進んでも優れています。むしろ大切なことは尊敬できる指導者と忘れられない患者に出会えるかどうか、です。努力している人間には必ず尊敬する指導者が現れると思いますし、また診断や治療の上で悩み苦闘をした患者からも多くのことを学ぶものです。進路を悩みすぎず、サッと決めてそこで頑張るという気持ちが大切です。
- ③ **40歳までに医師人生が決まる**：40歳までに自分にしかできない医療、医学を身に着けること。40歳以降はそれまでの結果次第だと思います。医師は30歳台が最も大切ということです。“この件は日本では〇〇先生に聞け”と言われることを是非目標にしてください。
- ④ **研究、留学を経験してほしい**：自分にしかできない医療、医学は研究生活や留学で得られることが多いと思います。特に海外留学は一度経験して苦勞をしてほしいですね。同時に異文化の経験は人間力も高まります。
- ⑤ **女性にとって医師は最高のステータス**：女性医師は仕事と家庭を両立できる機会に恵まれた最高の仕事です。また今後は女性医師にしかできない分野も増えると思います。堂々と誇りと自信をもってやってほしいと思います。

次世代の医療を担う皆さん、頑張ってください。心から皆さんの活躍を願っています。



相引 眞幸

(愛媛大学大学院医学系研究科 救急医学 教授)

定年退職と言うこと

1. 研修医時代まで

私は、愛媛県の伊予土居町の出身で、丸亀市にある大手前学園から金沢医科大学に入学しました。卒業後、母校の麻酔科学教室に入局しました。理由は、整形外科の義兄が何科になるにしても、麻酔科を勉強すると良いと強く勧めてくれたからです。その年、入局が私一人で、三ヶ月目頃から、開心術と脳外科手術の麻酔、緊急の新生児の麻酔など難易度の高い麻酔を担当する日々でした。手術中は原則用手換気で管理し、手の腱鞘炎にもなりましたが、そのおかげで患者さんの肺のコンプライアンスの感じ方など多くのことが習得できました。このように、金沢医科大学病院と言う田舎の病院でしたが、頑張れば多くの症例が経験でき、充実した研修ができるのです。当時経験した多くのことが、現在の私の土台になっています。“若い方々に伝えたいことの一つ目は、研修は場所ではない、各自の意思なのです。これは、時代が変わっても普遍的な事だと思います。”

2. 母校で研修を終えその後、力を蓄えてから武者修行に出ました
 当時から麻酔業務よりも集中治療や救急医療に興味があり、卒業後5年目、このまま金沢で勉強するのが良いのかなど思い悩んでおりました。ちょうどその年、父の親友であった救急医学会の創始者である恩地裕教授から、新設の香川医科大学で麻酔・救急医学講座と言う教室ができるが、「あなたの息子どうや」と言う話がありました。その話を聞いた時、まさしく、私が今進むべき道はこれだと思いました。当時、二人の幼子がおおり大変な時期でありましたが妻は、転勤を快諾してくれました。今も心から感謝をしています。

新天地へ
 香川医科大学では、手術室、集中治療部、救急部を組織横断的に運営管理されていました。超多忙でしたが充実した日々でした。香川在職中、信州大生理学で2年間、米国サウスカロライナ医科大学生理学で1年間勉強してきました。その時々自分の興味を、時期を見極めながら追求してきた結果だと思います。小栗教授の退職に際して、同門が講座を継ぐ事ができず、厳しい現実ですが、私は教室を去ることを余儀無くされました。

また新天地へ
 故郷で開業も考えましたが、香川から愛媛大学に赴任されていた白川洋一先生から、以前よりお誘い受けており、愛媛に帰ることにしました。私のように、転々とした経歴の持ち主は少ないと思います。キャリアパスなどない時代で、人生何とかなるだろうと言う気持ちでした。それが良いか別問題ですが、自分なりに努力をしていれば、誰かが見てくれていてチャンスは必ず来ると信じています。“若い方々に伝えたい二つ目は、キャリアパスも大事ですが、状況が変化していく中で、自分が今、本当に何をしたいのかを見極め、周囲のバランスも良く考えながら行動することの方が重要と思っています。”

3. 定年退職と言うこと
 愛媛に赴任して現在で17年が過ぎ、教授職に就いて11年になります。来年平成31年3月31日付けで定年退職します。かなり駆け足で過ごしたこの数十年でした。家族の犠牲も省みる余裕もなく、生産性を重視して生きて来ました。この辺で、一度ゆっくりしようかとも思いましたが、多分それはしません。定年退職とは、一つの通過点なのだろうと思います。再度、これから自分がなすべきことを見極めるための出発点なのだろうと思います。最後に学生諸君、研修医諸氏の健闘を祈っております。



石原 謙

(愛媛大学大学院医学系研究科 医療情報学 教授)

退任のご挨拶

光陰矢の如しという言葉は今さらのように嘸みしめている。多くの先輩・同僚・後輩やスタッフに支えられて過ごした、長いようで短い21年であった。まずは、皆様により御礼を申し上げます。
 病院情報システムが無事に動いて当たり前、仕事はバンデューがしているのだろう、とだけ思われがちなの部門なので、敢えてご説明しておきたい。

医療情報部門は、大きく二つの側面を持っている。皆様の通常認識している医療情報部は現業部門であり、物(薬や機材など)・情報(カルテや検査データ、保険点数など)・人(患者とスタッフ)というあらゆる資材とクライアントが、必要ときに、必要な所へ、適切な状態で提供される医療ロジスティクスの基盤である。これには、木村映善前准教授の八面六臂の活躍と、真剣に職務に取り組んでくれたスタッフのおかげで、日本の大学の中でも抜きん出た仕事が出来たと思う。ときにはトラブルもあったが、総括すれば他大学が驚くほどの低廉な金額で、安定・高速システムを維持できたことは国立保健医療科学院に割愛中の木村映善統括研究官とともに密かに誇っておきたい。

もう一方のアカデミックな医療情報学の部門では、木村映善前准教授の数々の医療情報学での業績とともに、その揺籃である医用電子分野での私の研究成果は医療機器製品にもなり、例えば愛媛大学医学部の総合健康センター重信分室でも使われているシスメックス社のアストムという商品として結実した。国内外での特許出願は100件ほどになり、日本の国益を守った権利もいくつかはあるものと矜持を持っている。

医用電子の授業と実習は、限られた時間の中ではあったが系統的な教員の講義と、主たる医療機器の濃密な操作実習などを、学内外の先生方や企業の皆様方のご協力のおかげで実施でき、他大学の関係者からは羨望の眼で見ていただいたことも、今後の愛媛大学からの新しい医療機器開発を期して退職後の楽しみである。

これからは、あらゆる医学分野がビッグデータを基盤にしてAIを活用し、医療機器をフル活用する時代となる。前記の成果は、そのための絶好の環境基盤を愛媛大学医学部に根付かせたものである。今後ともぜひ発展的に愛媛大学で育てていただきたい。

中国を眺めると、既に山口大学はAIセンターを設立して北野宏明氏を顧問に戴き、高知大学は30年余の整備されたDBを数名の教員が臨床各科と協力して10名余のスタッフでマイニングしており、数々の知見を論文文化している。どの臨床科も専門細分化してポスト不足・スタッフ不足に嘆いている現状はよく分かるが、今、愛媛大学医学部として必要なのは、大局観に立つこれからの医学部と附属病院の進む方向性であろう。患者に学び患者に還すことを、蓄積データの詳細解析なしに実行することはできない。次の医療情報部と医療情報学講座においては、ぜひともそれぞれ二人ずつのスタッフ増員をお願いしたい。現在の教員とスタッフの不足は、学内の監査者や外部評価の際にも必ず指摘されていることなのである。

21年間本当にお世話になりました。



25年の外務省医務官生活を終えて

伊東 久雄 (1期生)

(藤沢本町ファミリー/トラベルクリニック)

1期生の伊東です。平成4年から平成29年までの25年間、年齢なら丁度40歳から65歳まで、外務省医務官として大使館や総領事館に勤務していました。きっかけは、医事新報の外務省医務官募集広告です。軽い気持ちで応募したところ、簡単な面接で採用が決まり、直ぐに4カ所のオファーがありました。当時、医務官は30名程度で、漸次増員している時期にあたっていました。因みに、現在は100名を超える医務官が各地の在外公館に勤務しており、ほぼ欠員があった時のみの募集(毎年若干名)となっています。半年後の平成4年3月に、家内と小学生の子供3人を連れてダッカに赴任しました。

一般的に外務省職員は、在外公館勤務を2ヶ所廻ると東京に戻るパターンが多いのですが、医務官に限っては、そのポストの殆どが在外公館のため東京に戻ることは稀です。1ヶ所の勤務期間は2年半から3年半で、私の場合も東京の人事担当者の勧め(命令)のままに、ダッカ→バンコク→モスクワ→テヘラン→パリ→イスラマバード→チュニス→バグダッド→マイアミの9ヶ所を異動しました。

医務官の中には、勤務地でクーデターや暴動、航空機事故などの大事故、地震・津波などの大災害に遭遇し、波乱の中にも大活躍される方が多いのですが、残念ながら(幸運にも)私の場合はほぼ平穏で、これと云ったエピソードのないまま25年間を過ごしました。ほぼ言ったのは一つだけ、クーデターがありました。チュニス勤務の時にいわゆるジャスミン革命が起こり、大使公邸周辺でも革命当日には銃撃戦があったのですが、たまたま私は帰国中で、数日後にチュニスに帰任したのですが、その時にはもう平穏な日常に戻っていました。

愛媛大学の卒業生で医務官になったのは私が初めてだと思いますが、その後はほぼほとと医務官になる方が出ています。今も3人の卒業生が、中東や中南米等で活躍されています。チュニスに勤務していた時の私の後任は、なんと20期生の長井俊治先生(注釈: 国立がん研究センター東病院で医師として従事されたのち、ルワンダさらにレバノンで医務官を務められています。)でした。彼は複数の邦人旅行者が巻き込まれたバルド博物館襲撃事件の際には、大変重要な役割を果たされました。

医務官としての勤務は、忙しい時もありますが、概ねヒマです。3カ所目のモスクワでは、仕事にも慣れ、子育てでもほぼ終わったことから、「囲碁」をロシアの子供達に混じて習い始めました。テヘランでは、山歩きとスキー、パリでは、「牡蠣開け」から料理に目覚め、イスラマバードでは、「料理人」修行、チュニスでは毎週、中央魚市場にマグロを求めて「寿司職人」修行、バグダッドでは、敷地内から一歩も出られずにお休みで、最後のマイアミでは、寿司ネタを求めて「釣り三昧」(写真:マイアミ沖で釣った20lbのAmber Jack)でした。

医師としての人生の半分以上を医務官として、あちこち「放浪」したわけですが、それなりに納得できるものだったと思っています。帰国後は藤沢で医務官の経験を活かして、友人のクリニックでトラベル外来をやりながら手伝っています。そして目の前に広がる相模湾での釣りや料理を楽しんでいます。



愛媛大学医学部1期生入学 ～「もしかすると、この時のため」～

樋野 興夫 (1期生)

(順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授)

今から約1300年前、712年に編纂された「古事記」に登場する、医療の原点を教えてくれる大国主命の出雲大社から、8キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、私の生まれ育った出雲市大社町鶴崎である。隣の鷺浦地区と合わせて、鶴鷺(うさぎ)と呼ばれている。713年に編纂が命じられたという「出雲国風土記」にも登場する歴史ある地である。その村で、私の生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(boys be ambitious)である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラーク(1826-1886)が、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている言葉である。もちろん、当時の私は、クラークのことも札幌農学校のことも知らず、クラーク精神が新渡戸稲造(1862-1933)、内村鑑三(1861-1930)という後に、私の尊敬する2人を生んだことも知らぬまま、ただ、鶴鷺小学校の卒業式で、来賓が言った言葉の響きに胸が染み入り、ぼっと希望が灯るような思いであったものであるこれが私の原点であり、そして、浪人時代の19歳の時から、尊敬する人物を、静かに、学んできた。その人物とは、南原繁(1889-1974)であり、上記の新渡戸稲造・内村鑑三であり、また、矢内原忠雄(1893-1961)である。思えば私の人生は、小さな村での少年時代の原風景、浪人生活での人生の出会い、学生時代の読書遍歴(内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄)、癌研での「病理学の出会い」、アメリカでの「学者の風貌(Knudson博士:1922-2016)との出会い」と「人生邂逅」の「非連続性の連続性」であった。

医師になり、すぐ、癌研究会癌研究所の病理部に入った。そこで、また大きな出会いに遭遇したのであった。病理学者であり、当時の癌研究所長であった菅野晴夫先生(1925-2016)は、南原繁が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人となりを直接うかがうことが出来た。南原繁には、ますます深入りし、さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本国の誇る病理学者:吉田富三(1903-1973)との出会いに繋がった。吉田富三は日本国を代表する癌病理学者であり、菅野晴夫先生の下で、2003年、吉田富三生誕100周年記念事業を行う機会が与えられた。吉田富三の論文、著作を熟読し、これを機に、吉田富三への関心が高まり、深く学んでいくことになった。こうして南原繁との出会いから約40年、さらに、吉田富三との出会いが、追加され、必然的に「がん哲学」の提唱へと導かれた。さらに、幼年期の田舎の診療所のイメージが重なり、「陣営の外=がん哲学外来」へと展開した。

「がん哲学」とは、南原繁の政治哲学と、元癌研所長で東大教授であった吉田富三のがん学をドッキングさせたもので、「がん哲学=生物学の法則+人間学の出会いの場」でもある。私が「がん哲学外来」で語るの、これまで学んできた先達の言葉である。まさに「言葉の処方箋」である。「がん相談」や「セカンドオピニオン相談」には異なる「愛媛(すき間)なのであろうか。『がん哲学外来』は対話型外来が基本である。

鶴鷺小学校 → 浪人生活 → ニッポ大学医学部1期生10月入学 → 癌研(発がん & がん哲学) → アメリカ留学(Knudson博士、遺伝性がん) → 順天堂大学医学部(がん哲学外来)は、私の「人生の邂逅の道」である。まさに、「もしかすると、この時のためであるかもしれない」。



ロレンツォのオイルを求めて

加藤 雅明 (5期生)

(森之宮病院 心臓血管外科)

私は愛媛大学卒業(1983年卒)後・約35年間をほぼ臨床医(心臓血管外科医)として働き続けてきました。この臨床生活の前半・15年間に2つの意義ある仕事ができたと考えています。一つはB型大動脈解離の治療に変革をもたらしたこと(Preemptive TEVAR = 先制ステントグラフト治療の概念を導入)、もう一つは弓部大動脈手術に新しい術式(Frozen elephant trunk法)を開発し普及させたことです。私がいこれらのそれなりに大きな成果を挙げることができたのは、客観的には限りなく幸運、主観的には下記の理由があったからだと思っています。

私は大学での研究生活や留学経験などはほぼ無く、もっぱら臨床現場に埋もれた毎日を過ごしてきました。臨床医療にはとにかく熱心に取り組みましたが、熱心であればあるほど、患者の苦痛や苦悶がこちらに伝わってくるため、「何とかしなくては」という強迫観念と自らの無力感に苛まれることになりました。このため多くの先輩に教えを請い、自ら勉強に励み、手術の練習を怠らず、「もうちょっといい治療が無いものか」と悩む日々を送りました。その頃の外科は徒弟制度が根強く、私にも「手術の達人」といわれた師匠がおりましたが、その師匠の「名人技」をもってしても治らぬ患者が多くおり、「名人技」を受け継ぐだけでは、多くの患者を満足させる医療にならないと感じていました。患者の悲痛な叫びのようなものが臨床現場にはあふれています。その叫びをあえて聞かないようにすることは簡単なのかもしれませんが、それでは医師になった意味が無いと私は考え、正面から向き合って35年間を過ごしました。その中で生まれたのが上記二つの仕事だったと思っています。

現在、そしてこれから臨床現場に立つ愛媛大学・後輩の先生へ伝えたいことがあります。患者の苦痛や苦悶に正面から向き合ってください。こちら側にもかなりの苦痛が伴いますが、それが医師としての責務だと思います。

「ロレンツォのオイル」という映画があります。見たことがなければ是非見てください。私の言いたいことが私の文章より100倍の説得力で迫ってきます。

50周年に向けて、一期生雄志座談会

<薬師神>

本日はお忙しい中、お集まり頂き有難うございます。今年(2018年)から来年にかけて、1期生の先生方は65歳以上となり退職される時期にあたります。退職されても、医学部・附属病院に関心を持ち、継続的に深く関わっていただきたいという思いから、本座談会では、私どもにとっては長男にあたる皆様方に集まっていただきました。当時の写真もお持ちいただいて、医学部や病院の変遷をお聞きしたいと思います。

そもそも、1期生は入学式から少しレギュラーだったんですね。



愛媛県立衛生環境研究所長
愛媛大学客員教授 四宮博人

<四宮>

当時、医学部の事務所は松山市の堀之内にありました。衛生研究所の建物の一角に、看板があったと思います。現在の医学部の病院等は、まだありませんでした。



<樫本>

入試の倍率は37倍で、激戦でした。入学式は愛媛大学教育学部附属中学校の講堂(章光堂)で行われました。2年分を1年半で終わらせるんですから、文京町のキャンパスで、教養科目の授業ばかり受けていました。医学概論を重信キャンパスでたまに受けるぐらいで、医学部に来たという実感が少なかったですね。

<畠山>

病棟も併合病棟のようなもので、今のように第一内科、第二内科などの単科に分かれてはいませんでした。3~4年生の頃に、ようやく医学部の建物ができ、そこから授業も重信で行うようになったと思います。

<薬師神>

附属病院についての思い出はありますか？

<四宮>

附属病院の完成時に、開設式が行われました。教授陣も学生達もものすごく盛り上がり、夜中までずっと飲んだ(笑)という記憶があります。できたばかりの医学部の教室の中でも飲んでいました。どの医局も入局者が欲しいので、夕方になると学生さんと親睦を図っていましたね。

<薬師神>

国家試験対策についてはいかがでしょう。今の学生には試験対策専用の部屋が用意され、恵まれている環境です。

<森本>

当時は、授業で取ったノートで勉強していれば合格した、というような感じだったと思います。今と違って、全体的には合格しやすい状況でしたね。そもそも、普段の日には実習や試験もあって、国家試験の勉強自体は1~2ヶ月ほどしか集中できませんでした。今は覚えることが非常に多く、難しくなっていると思いますね。



<薬師神>

最近は医学部の女子学生数について話題になっています。1期生にも女性の方はいたんですね。

<櫃本>

当時、100人クラスで女子学生はたった3人！男性と同等の扱い方をされていましたが、遅かったですね。その内の1人は、アメリカに移住しました。

<薬師神>

先生方は愛媛大学卒業生で初めての医局員でした。入局時の思い出はいかがでしょう。名物教授も多数いたと伺っています。

<四宮>

1期生なので、当然先輩がいません。私たちは先生と学生という関係性の中から学び取るという難しさがありました。先生方にも自分たちにも緊張感がありました。僕の指導教官の内海先生(微生物学・免疫学)はかなり厳しい人で、「君らが独り立ちするためには、今以上にもっともっと頑張らないといけない」と夜中から説教を始めて、お酒を交え翌朝まで続いた、ということが何度もありました。先生も我々も若く、体力があったんです。朝になると生協の食堂が開くのを待って、一緒に朝食をとって仕事に戻ったということ覚えています。

<森本>

学生時代は、あまり勉強しませんでした。卒業してからの2年間、研修医の頃はかなり努力しました。調べることも多く、勉強するスイッチが入った時期です。最初の1年間は、ほとんど休みもなく勉強していた記憶があります。自分が当直ではなくても、指導教官が当直なら、勉強のために一緒に当直をしてソファで寝ることもありました。若かったのもありますが、それ自体を楽しんでいると思ってやっていたね。初代の教授、松田先生はジェントルマンで、

厳しいところもあったけれど優しい印象が強いですね。入局時に挨拶に行くと、その場で成績表を見られ、ほとんど赤点ということがわかってしまい… なんとか卒業できたのも、松田先生のおかげです。効率よく点を取る方法も教えていただきました。

<畠山>

私は脳外科でした。入局当時は症例数も手術も少なかったのですが、患者さんとよくしゃべっていた記憶があります。この時の患者さんとの会話のやりとりは、その後のコミュニケーションスキルにとっても役に立ちました。また、手術件数は少なかったのですが、上司の先生方が若手の私たちに積極的に手術をさせながら指導していただけたのはありがたかったです。初代の松岡健三先生は非常にざっくばらんな方でした。患者さんには穏やかに優しく話される先生でした。

<櫃本>

私の恩師だった木村慶教授(公衆衛生)もそうでしたが、当時の先生方に共通して言えるのは、それぞれが強い「使命感」をもっておられました。木村先生は医学部設立前に、先に愛媛県庁に籍を移し、公衆衛生の普及に関わっていらっしゃいました。どの先生も、この地域に根付いて(骨を埋めるつもりで)、誠心誠意尽くそうという強い意志がありましたね。もう一つ良かったのは、ルールがなく、自由で非常に和気藹々とし



済生会松山病院
脳神経・脳卒中センター長
畠山隆雄



<免疫学>



四国医療産業研究所 所長
日本医師会総合政策研究機構
客員研究員 櫃本真幸



旭川荘南愛媛病院・
南愛媛療育センター
発達支援センター所長
森本武彦

た環境だったことです。医局のしきたりとか、派閥がどうか、そういうことがなかったのは良かったですね。

<薬師神>

初代の先生方の多くは亡くなられたとお聞きしています。

<櫃本>

寂しいことです。亡くなられた先生のほうが多いですね。初代の先生方は、本当に名物教授が多かったです。今でこそ、これだけの時間経ちましたが、当時の愛媛大学は「新設」とよく言われました。それこそ部活動も自分たちで立ち上げました。私はラグビー部の立ち上げに関わっています。ラグビー部の繋がりは今も強いですし、当時作った部が今も活躍してくれていると、時を超えて繋がりを感じます。

<畠山>

私は軟式テニス部でした。散々負けた記憶しかありません(笑)。今は同窓会誌に準優勝とか優勝とか書かれていて、すごいなって思いますね。僕ら1期生、2期生の頃からの数十年の重みというか、経験が集まり、積み上げられて、伝えられていくことで、現在の愛媛大学医学部になっていったのかなと思います。嬉しいことです。

<薬師神>

最後に、現役生や今後の医学部にメッセージをお願いします。

<四宮>

初代の医学部長、須田正巳先生(生化学)が、よく僕たちに「我々は脱藩浪士である」という言い方をしていました。医学部創設期の先生方は、既存の大学から来ていましたが、出身大学のやり方を持ち込むのではなく、愛媛大学医学部で新しいものを作っていくという気概がすごくありました。今では愛媛大学医学部には十分な伝統があります。今後は、大学の伝統というよりは医師個々の生き方が問われます。だから、今の学生さんたちには自分たちのキャリア、医師としての人生をクリエイティブにしたいです。新しいことにチャレンジし、新しいものをクリエイティブに、自分たちの時代の医師モデルを創造するという気概と熱意を、創設期と同じように持っていただきたいです。

<森本>

愛媛大学は地方の大学ですが、今はグローバル化の時代。急速な社会の国際化の動きに、愛媛大学も医師も無関心ではられません。大学のある地域に目を向けることはもちろん、同時に世界も意識することが大事だと思います。学生さんがグローバル化の中でも能力を発揮できるよう、頑張りたいです。ただ、留学生が少なくなっている現状は寂しいことです。

<畠山>

素晴らしい先生方との出会いを経て、私が学んだのは「情熱」です。愛媛大学医学部が四国の地方都市でありながらもここまで大きく成れたのは、先生方の絶えることのない情熱があったからだだと思います。学生に対して伝えたいのは、授業にも国家試験にも追いついてもらって、なんとか医師になる、ただそれで終わってしまうと場当たりの人間になって研究も臨床もその場限りになりかねません。医療や医学を探究する喜びに欠けますし、面白味もないのではと思います。医師としての人生において、研究にも臨床にも、初代の先生方のような情熱を持ってあたって欲しいと思います。



<ラグビー部>



愛媛大学医学部同窓会会長
薬師神芳洋

< 橋本 >

愛媛大学医学部は、地域に根ざすことと、患者に学び患者に還元するということを軸足に置いています。疾病管理重視ではなく、その人らしい生き方を支援することを第一にして、地域を見て患者さんとしっかり話をして欲しいです。そして「未来のための今」を意識し、「伝統」よりも「新設」を貫き通して欲しい。決して今は過去の遺産ではありません。未来のために今があって、未来のために生きて欲しいと考えます。63歳になった私も、過去にとらわれず今を過ごしたいと思っています。皆さんも1期生のつもりで、自分たちの時代を創ってください。

< 薬師神 >

本日は1期生の先生方にお集まり頂き、愛媛大学医学部の変遷を皆様方の視点から語って頂きました。とても興味深いお話が聞けたと思います。

5年後医学部は50周年を迎えます。それに先立ち2019年には大同窓会も計画されています(来年8月第1土曜日で予定)。卒業生の皆さんはもちろん現役の学生諸君にも参加していただき、医学部や附属病院の変遷、現状などが共有できればと考えています。

本日はありがとうございました。



< 記念誌 >

オープンキャンパス開催

8月8日(水)

医学部重信キャンパスでオープンキャンパスを実施しました

平成30年8月8日(水)、医学部重信キャンパスでオープンキャンパスが実施され、医学部(医学科・看護学科)に興味のある高校生ら総勢423人が参加しました。

はじめに、それぞれの学科長から歓迎の挨拶があり、カリキュラムの策定や学生生活の支援などを担当している教員から、各学科の紹介や入学後のキャンパスライフに関する事、入試の概要などの説明が行われました。また、医学部総合医学教育センター長の小林直人教授による模擬授業が、実際の医学部生への講義と同じスタイルで行われました。小林教授による講義は、受講生が質問の真意を理解した上で自ら考え、意見をまとめて発表するなど、スピーディーな展開で授業が進んでいました。

午後からは、各講座や病院見学のグループに分かれ、体験実習を行いました。精神神経科学講座を訪問した参加者は、脳画像の解析や疫学研究の要素など、これまでにイメージしていた精神科の領域を超えた研究・診療内容に驚いた様子でした。

参加者にとって、医学に関する興味が更に膨らむイベントになったことを期待しています。



海外医療研修に参加して

毎年同窓会では、海外医療研修に参加する医学科学生に資金援助をしています。今年も、参加した学生から研修レポートが届きました。

■ 勝間田 莉帆(6年生)

(左から2番目)

私は2018年7月1日～7月14日までの2週間、中国の大連医科大学で臨床実習をさせていただきました。

初めの2日間は、大連医科大学の案内をしていただきました。構内はとても広く、学生数の多さにも驚きました。シミュレーター実習棟、解剖学実習棟の中を見させていただきましたが、設備が整っており、学生が勉強しやすい環境がありました。その恵まれた環境に甘んじることなく、一生懸命勉強をする学生の姿に刺激を受けました。

病院実習では、循環器内科、泌尿器科、救急科を回らせていただきました。循環器内科では、回診、カンファレンス、外来見学、心臓カテーテル見学をさせていただきました。先生方は患者さん一人一人の状態を説明してくださり、また私たちの疑問にも丁寧に答えてくださいました。外来見学は日本と異なり、中国の患者数の多さをひしひしと感じました。泌尿器科では、カンファレンス、手術見学をさせていただきました。腹腔鏡手術では術野にも入らせていただき、画面を見ながら解剖や手術の流れを教えていただきました。救急科では、主に重症患者さんの全身管理を勉強させていただきました。それぞれの患者さんの状態とそれに対してどのような処置を行っていくか、教えていただきました。日本と比べ、外傷の患者さんが多かったことが印象的でした。

たくさんのお親切な先生や学生のおかげで非常に充実した日々を過ごすことができました。ご飯を食べに行ったり、休日観光に行ったりと現地の方と交流を持てたことも今回の留学で得られた財産だと考えております。この貴重な経験を今後の医師人生に活かせるよう、さらに勉強や実習に励んでいきたいと感じました。

最後になりましたが、今回の留学にあたりお世話になりました先生、国際化推進室の方に心から感謝申し上げます。



■ 土居 雄太(6年生)

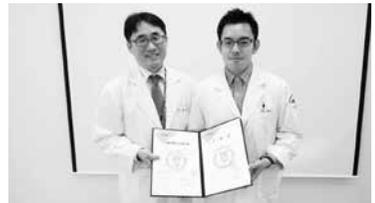
(右側)

2018年6月10日から24日の2週間、韓国の江原大学病院にて産婦人科と小児科を1週間ずつ臨床実習させていただきました。

産婦人科では外来でのエコーや、手術の見学をしました。帝王切開の手術では、実際に術野に入り助手をさせていただきました。非常に良い経験だったと感じています。小児科ではNICUの見学や、陰圧室の見学、防護服の着脱体験などを経験しました。韓国では、2015年にMERSの流行があったことから、感染症への対策が日本よりも進んでいるようです。呼吸器疾患などについては講義もあり、英語で臨床講義を聞くのは新鮮で、とても刺激的でした。また、様々な先生の留学経験についてお話しを聞く機会もあり、夜は先生方や学生が食事に連れて行ってくれたことが多く、楽しい日々を送ることができました。

今回の実習中、自分の英語力不足で相手に意見をうまく伝えられず、もどかしい思いを何度もしました。その度に先生方や共に研修した学生に助けられ、2週間かけがえのない経験をする事ができたと同時に、これからの学習意欲が強く刺激されました。今回の経験を忘れず、これからも医学の勉強とともに英語も身につけていきたいと思えます。また、海外からの留学生と接する機会があれば、率先して関わっていききたいです。そして、自分が得ることのできた経験を後輩や同級生に伝えていこうと思っています。

最後になりましたが、海外で臨床実習を行うという貴重な機会を得られたのは、皆様のご支援あってのことだと深く感謝しております。また、このプログラムにご尽力くださった国際化推進室の方々に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



■ 藤井 美名(6年生)

(右から7番目)

私は2018年7月に、中国の大連医科大学で2週間臨床実習させていただきました。まず、最初の2日間は、大連医科大学キャンパスの見学をしました。大連医科大学のキャンパスは大変広く、様々な設備が揃っており、学生が学業に専念しながら充実したキャンパスライフを送れそうだと感じました。その後、大連医科大学付属病院で循環器内科と、泌尿器科、感染症内科で実習を行いました。循環器内科では、回診やカンファレンスに参加し、カテーテル治療の見学などを行いました。泌尿器科では、腎摘手術に入って術野で介助するなどの体験をさせていただきました。感染症内科は、1日だけという短い時間でしたが、肝炎、不明熱の治療を勉強しました。

この2週間の実習を通して、言葉では言い表せないほど多くの経験をする事ができました。私は中国へ行くのが初めてで、不安なところもありましたが、実習を終えて必ずまた来ようと思うようになりました。実習では、医学についてだけでなく、中国と日本の医療制度の違いや、医師として働くまでの過程の違い、病院の雰囲気の違いなどを学ぶとともに、実際に生活してみて、良い面、悪い面などを感じることができました。今回こんなにいい体験ができたのは、国際化推進室の皆様、現地スタッフさんや先生方、大連医科大学の学生さん達のおかげだと思います。本当にありがとうございました。ぜひこれからも愛媛大学と大連医科大学で学生同士の交流を続けていってほしいなと思います。



■ 藤本 拓也(6年生)

(右から3番目)

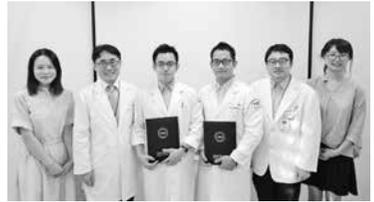
2018年6月10日から2週間、韓国の江原大学校へ実習に行く機会をいただき、産婦人科と小児科でそれぞれ1週間ずつ実習してまいりました。

短い期間でしたが、手術見学をはじめ各教授の回診や、カンファレンス、外来見学、講義などあらゆる方法で私達を快く迎え入れてくださいました。

今回の実習では医学的な内容よりも、韓国と日本の文化の違いについて多く学べたように感じています。私が特に興味深く思ったことは、大学病院にいる教授の人数の多さです。日本での教授という職務は各科のトップ1人のみですが、韓国では患者の「その病院で最も良い医師(教授)に見てもらいたい」という希望が強く、インターンとレジデントを終えると、そこから一飛びに教授に昇格するというシステムがあり、文化の違いとして非常に興味深く感じました。また、医師の数そのものが日本の大学病院と比べて少なく、そのため専門看護師という医師と看護師の中間程度の処置を行って良い職種が存在し、この専門看護師が2番手として術野に入っており、これもまた印象的でした。

今回の実習では、英語でのコミュニケーションが主体となりましたが、英語での学習も行ってきたこともあり、教授に質問したり、逆に教授からの試問に答えることもでき、うまく意思疎通ができたことで今後の自信になりました。海外での実習を通して、普段私達が目にするところ以外にも、新しい家族が生まれることを楽しみにする人であったり、様々な疾患に苦しむ人がいること、そして、そのケアにあたる医療者がいることを改めて感じました。この2週間で感じたことや得たことで、より良い医療者となって多くの人の役に立ちたいと気持ちを新たにすることができました。

最後になりますが、今回の実習の機会を頂戴するにあたりまして、ご支援・ご尽力いただきました先生方、国際化推進室、同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



■ 中川 友香梨(6年生)

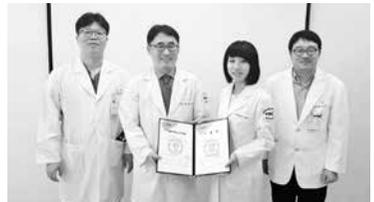
(右から2番目)

私は2018年5月27日から6月10日の2週間、韓国の春川市にある江原大学病院のERで臨床実習をしました。2016年8月にVIAの主催するMedical Exchange & Discovery program (MED)にて米国で3週間の医療研修を経験し、次は海外の病院で実習をしたかと思っていたところこのような機会を与えていただき嬉しく思います。

まず驚いたのは、救急システムの違いです。韓国の救急システムは北米型ERに倣っており、その地域一帯の救急患者が重症度に関わらず江原大学病院のERに24時間365日搬送されてきました。毎日100人以上、時には10分に1人の頻度で患者が受診してきました。軽い風邪から肺炎、心疾患、脳血管疾患、交通外傷など、疾患の種類も緊急性も様々でした。韓国にはKorean Triage Acuity and Scale (KTAS)という独自のトリアージシステムがあり、専門のナースによって1～5段階にトリアージされます。その後、医師が問診や身体診察、検査のオーダーなどを行い、必要であれば他科にコンサルトして治療方針を決めていました。過去にMERSが流行したこともあり、ERには4つの陰圧室がありました。ERドクターの勤務時間は午前9時から翌日の午前9時までであり、日本のように当直がないということも驚きました。様々な相違点はありましたが、高齢者の割合が多いことや軽症患者の受診率が高い点などは日本と共通の問題を抱えていると感じました。

当初韓国での実習は歴史的な経緯や英語面等で様々な不安がありましたが、医学生や先生方が温かく迎え入れてくださり、充実した楽しい実習をすることができました。医療の知識や技術だけではなく、韓国の食や文化にも触れることで自分の視野を広げることができたと思います。観光中に迷っているところを助けてもらったり、お店で料理の食べ方を教えてもらったり、現地の人の優しさにも助けられました。本当にたくさんの人に支えられたおかげで無事に実習を終えることができたと思います。

最後になりましたが、江原大学への留学に当たりご尽力頂きました先生方、国際化推進室の皆様、ご支援いただいた同窓会の皆様により御礼申し上げます。今後はこの経験を生かしてより良い医師となれるよう、そして後輩達に繋いでいけるよう努めたいと思います。本当にありがとうございました。



■ 松本 夏鈴(6年生)

(右から2番目)

私は2018年5月28日から6月8日までの2週間、韓国の江原大学病院の救急科、消化器内科、呼吸器内科で臨床実習をさせていただきました。

救急科では、多様な症状を訴える患者さんに対する身体診察や、心エコー、縫合などの処置を見学させていただき、消化器内科では、消化管内視鏡検査やERCPといった手技を見学させていただき、呼吸器内科では、気管支鏡検査や外来、講義、学生たちの症例発表を見学させていただきなど、2週間という短い期間でしたが、様々な実習に参加することができました。

日本との相違として、韓国では癌のスクリーニング検査として上部消化管内視鏡検査を無料で受けられたり、肺癌のリスクの高い喫煙者は胸部CTを無料で受けられたりするなど、癌を発見するためのスクリーニング制度が整っていることや、韓国の学生は実習で動脈採血を行ったりするなど、実習で手技を行う機会が多いことが印象的でした。

韓国では、学生たちは皆英語の医学書を用いて勉強しており、医師同士も英語の医学用語を用いてコミュニケーションを取っていました。そのため、皆英語の医学用語の知識量が多く、英語のスピーキングについても堪能な学生が多いと感じました。その中で自分が伝えたいことを英語で的確に伝えられない場面もあり、自分の英語の未熟さを痛感しました。これから医学を勉強するときは、常に英語の医学用語を意識しながら勉強したり、英語論文を読んだりしながら英語の知識を増やしたいと思います。

韓国に滞在した2週間で、現地の先生方をはじめとしたスタッフの方々や多くの学生達にお世話になりました。医学や韓国・日本の医療について意見を交換したり、互いの国の文化や観光についての話をしたり、本当に充実した2週間を送ることができたと同時に、異文化に触れることで自分の視野を広げることができました。

最後になりましたが、このような素晴らしい学びの機会を与えてくださり、今回の臨床実習を行うにあたってご尽力いただいた先生方、国際化推進室の皆様をはじめとした全ての方々により御礼申し上げます。



■ 吉岡 史江(6年生)

(左から3番目)

私は、2018年7月1日～14日の2週間、中国の大連にある大連医科大学附属病院の循環器内科、糖尿病内科、泌尿器科、小児科の臨床実習をさせて頂きました。留学に子供の頃から興味があり、今まで中々機会がありませんでしたが、今回留学の勉強に加え海外の医科大学で勉強できるということで応募しました。

中国の最初の2日間は、教授や向こうの学生さんと一緒に大連医科大学を見学しました。中国の医師国家試験の会場の一つでもあるらしく、規模がとても広くシュミレータ室も非常に豊富で感動しました。3日目以降は病院実習で、どの科の先生方も優しく丁寧に接して下さいました。中国の外来は予約制ではなく、当日に多くの患者さんが診察室の前に並んでおり、日本との違いを感じました。また薬に処方箋は要らず近くの薬局で購入できることや、日本やアメリカとも違う中国の保険システムも印象的でした。

事前に医学英語の勉強をしていった為、先生と英語で上手くコミュニケーションを取ることが出来ました。今回の留学で、英語のブラッシュアップが出来たと実感しました。また中国人の友達が沢山出来たことが何より嬉しかったです。皆さん本当に親切で、忘れられない思い出が出来ました。一生大切にしていきたいです。私達が「大連医科大学の交換留学1期生」ということで、この素晴らしい経験を是非後輩の皆さんにもして欲しいと思います。

今回海外で臨床実習を行うという貴重な機会を与えてくださり、支えて下さった先生方、国際化推進室の方々に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



■ 吉川 彩(6年生)

(左端)

2018年7月に2週間、中国の大連医科大学にて循環器内科、泌尿器科、産婦人科を見学させていただきました。中国に行くのは今回が初めてで、医療はもちろん現地環境やインターネット状況など分からないことが多く、また往路の飛行機が8時間遅延したこともあり最初は不安もありました。しかし現地では大連医科大学の方が親切にもてなして下さり、中国の人々の優しさに触れて感激し中国という国が好きになれたのは一つの大きな収穫だと思います。また、中国では街中でも英語がほとんど通じず、世界共通語なので通じるだろうと思って現地に出向いた私はとても驚きました。コミュニケーションが取れずに苦戦することも多々ありましたが、Body Languageや図、漢字を使って乗り越え、何事にも挑戦してみる向上心を得ることができたと思います。

大連の病院では患者数がとても多く、大半が予約無しで来るために特に外来はとても混み合っており、一つの診察室に3組くらいの患者が医師を囲んでそれぞれの訴えを話している場面が印象的でした。産婦人科のエコー室では1日に100人超の患者を診察するそうで、中国では短時間で効率よく患者を診察するスキルが大事だと思いました。また、手術室では清潔・不潔の概念が中国と日本では少し異なり、日本の方が清潔であることに気を使っている印象で、中国における術中感染の割合が気になりました。逆に手術時間は中国のほうが早い印象を受け、その要因は中国では上の先生が主に執刀医をし、学生や研修医に手取り足取り教えるわけではないことにあるのではないかと推測しました。

中国と日本の医療の違いをみて、海外の医療にますます興味が湧くとともに自分の知識や技術の未熟さに気づき、これからもっと勉強に精進しようというモチベーションにもなりました。このような貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。



医学祭を終えて

第42回愛媛大学医学祭実行委員長 日浅 悠



5月19、20日に第42回愛媛大学医学祭を開催させていただきました。今回の開催につきまして、多くの方にご協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

今年の医学祭のテーマは「Innovation」といたしました。このテーマには、先輩方が積み上げてこられた医学祭の伝統を引き継ぎつつ、自分たちの手で新たな医学祭を作り出していくという意思が反映されています。

悪天候との予報もありましたが、医学祭当日はなんとか晴天に恵まれ多くの方々にご来場していただきました。中学生、高校生対象の看護科体験ツアーやキャンパスツアーでは将来

的に医療に従事する可能性のある学生達の熱心な姿を目にしました。

ステージ企画では軽音部や吹奏楽部の演奏、空手部や合気道部の演武など、この日の為に一生懸命練習してきたサークルの輝かしい姿にステージは大変賑わっていました。その他、「SUPER BEAVER」によるゲストライブや各サークルによるバザー、フリーマーケットなどが催され、数多くの方々にご来場していただけたのではないかと思います。

また、講演会では愛媛大学大学院医学系研究科産科婦人科学の杉山隆教授に「愛媛県下の産婦人科医療の現状と方向性～医療における連携の大切さ～」をご講演していただきました。医療現場における多職種間での連携がいかに大切かということや県下の産婦人科の医療体制や今後の方向性に触れながら分かりやすくご講演していただきました。

教職員の皆様や諸先輩方、地域住民の方々など本当に多くの方々へ支えてもらい、医学祭が無事に終えることができました。医学祭を通して人との連携の重要性を肌で感じる事ができ、私自身にとってとても貴重な経験となりました。この経験を生かして医学祭がさらに発展していくために後輩を支えていくとともに良き医療人となるための糧にしていきたいと思っております。

最後に、第42回医学祭を開催するに当たり、協力して下さった関係者の皆様へ実行委員一同より厚く御礼申し上げます。

医学部課外活動(運動部)紹介

愛媛大学医学部 剣道部

剣道部主将 南 晴菜(医学部4回生)

こんにちは。愛媛大学医学部剣道部です。私たちは女子19人、男子10人の総勢29人で元気に活動しています！数年前は一桁だった部員の人数が当時では想像もつかない程増えたことで、どんどん活気づいています。通常の稽古は火土の週3日、武道場と体育館を使用させていただいており、毎回の稽古には数名の先生がご好意で来てくださっています。初心者が多い医学部剣道部ですが、初心者が大学から剣道を始めたにも関わらず、楽しく剣道ができ、そして強くなれるのは先生方のおかげであると部員一同感謝でいっぱいです。

一年間で参加している大会は、四国医科学生剣道交歓試合、中四国医科学生剣道大会、西日本医科学生総合体育大会および西日本コメディカル学生総合体育大会剣道部門(西医体、西コメ)です。少し前までは部員の人数が少ないことで団体戦の人数が足りないこともありましたが、最近では良い成績を取ることができるようになってきました。具体的には四国大会での女子団体戦優勝、西医体での男子団体女子団体ベスト8などです。個人戦で優勝を勝ち取る頼もしい部員もいます。今年の結果を踏まえ、さらに稽古に励み、来年の西医体西コメでは男女ともに団体戦で優勝できるように頑張りたいです。

稽古で真面目なのはもちろんですが、みんな楽しいことも大好きです！新歓の時期には新入生も交えて運動会をしたり、BBQをしたり、海に泳ぎに行ったりなど学年の垣根をこえて和気あいあいと学生生活を謳歌しています。これからも医学部剣道部は勉強はもちろん、稽古や遊びにも全力投球していきます。



《運動会の大縄とび》



《BBQにてマシュマロを炙る》



《海で騎馬戦》

愛媛大学医学部 準硬式野球部

準硬式野球部主将 山本 晴希(医学科5回生)

こんにちは。愛媛大学医学部準硬式野球部です。私たちは現在プレーヤー23人、マネージャー11人の計34名で週に4回、医学部内のグラウンドで活動しています。23人のうち3年生以下が17人と比較的若いチームです。近年は野球経験の少ない部員も増えてきており、今のチームでも高校野球まで経験しているプレーヤーは5人のみで、後は高校軟式や中学野球までの部員が大半です。中には大学から野球を始めた人も何人かいます！経験者の少ない中で少しでも上達できるように工夫しながら練習しています。特に今年は目標シートを作成して全員で目標を共有したり、外部からコーチを招聘したりと新しい取り組みを行いました。そのおかげもあり下級生をはじめとして全体のチーム力を向上させることができました。

私たちは四国地区の準硬式野球リーグの2部に所属しており、2010年以來の1部昇格を目指して春のリーグ戦を戦っています。しかし今年も3位に終わってしまい、入れ替え戦に進めていません。毎年個人タイトルを獲得する選手は出ているので、その選手を中心にチーム全体の實力を上げ、来年こそは1部昇格を目指して頑張りたいと思います。医学部中四国大会や西日本医科学生体育大会でも、近年では結果を出せておらず、2016年西医体でのベスト8が最高です。過去何度も優勝している先輩たちに肩を並べることができるよう、私たちも優勝を目標に努力しています。

また、野球部は普段から部として活動することがほかの部活よりも多く、部員同士の仲がすごく良いことも特徴の1つです。部活終了後の部員同士の食事をはじめ、定期的に親睦会やレクリエーションで結束を高めており、このことが日々のチームワークに繋がっています。さらにOB・OG会との繋がりもとても濃密で、毎年金銭的にも精神的にも大きな支援をいただいています。本新歓、忘年会、追いコンでは毎年OB・OGの先生にも来ていただき盛大な会を開いています。今後も支援して下さるOB・OGの先生たちの期待に応えられるよう頑張っていきたいと思います。



愛媛大学医学部 軟式テニス部

軟式テニス部主将 小西 里奈(医学科3回生)

【活動内容】

部員数は男子19人、女子19人の計38名(平成30年9月)で、主に月、水、土曜日の週3回練習に励んでいます。重信キャンパスのテニスコートは、ありがたいことに今年オムニコートとなり、気持ち新たに部員一同頑張っています。



【戦績(平成30年度)】

《男子》

関西医歯薬大会
 (団体戦)A チーム 優勝
 中四国大会
 (団体戦)A チーム 優勝
 B チーム 準優勝
 (B以下)
 (個人戦)和泉・門田ペア 優勝
 高橋・清家ペア 準優勝
 浅井・鳥羽ペア ベスト8

西医体
 (団体戦)準優勝
 (個人戦)和泉・清家ペア 第3位
 浅井・鳥羽ペア ベスト32
 全医体
 (団体戦) 第3位

《女子》

関西医歯薬大会
 (団体戦)A チーム ベスト4
 中四国大会
 (団体戦)A チーム 第4位

(個人戦)古賀・浮田ペア ベスト8
 山口・池田ペア ベスト8
 山本・堀ペア ベスト16
 武田・森迫ペア ベスト16

西医体

(団体戦)優勝
 (個人戦)山口・浮田ペア 優勝
 古賀・森迫ペア ベスト32
 山本・林ペア ベスト32

全医体

(団体戦) 優勝

27期生同窓会 報告

平成30年1月7日、2回目となる27期生の同窓会を大和屋本店で行いました。1回目は卒業後5年で開催していたのですが、その時には参加できなかった面々も多数参加し、久しぶりの再会を喜び合いました。

40歳手前という人が多い学年で、時期的には開業した人が出現したり、医局の中で責任ある立場となってきた人もちらほら出てきていたり、前回5年目でそろそろ専門が決まってきた頃とは社会的立場が変わってきていました。しかし、想像以上に変わらない外見や雰囲気により、学生時代に返ったかのような活気ある会となりました(社会人として節度ある会ではありました…ご安心を)。女性陣は子持ちが増えてきていたのですが、美容形成外科医を取り囲んで美容についての話題で盛り上がっていました。

次回3回目の時期は未定ですが、10年以内には…と考えています。今度はできれば企画ものもしたいなと思いますので、27期生の方、是非ご参加ください!!

(文責 桑原 淳)



30期生同期会 報告

去る2018年1月27日土曜日に、道後温泉ふなやにて30期初めでの同窓会を開催致しました。

5月頃から準備を始め、開催日を決定した時点では何人の同期に集まってもらえるか心配でしたが、蓋を開けると二次会から参加の方も合わせて46名もの同期に集まって頂きました。また、小さなお子さんを連れてきてくれた方もいて、会に華を添えてくれました。

10年全く会っていなかった同期もいましたが、一瞬で学生時代にタイムスリップしたかのように久しぶりに本気のタメグチで話ができました。会ではみんなにアンケートを取り、今の年収や家族のことなど、同期の暮らしぶりが分かる集計結果が発表され、ぶっちゃけデータにみんな話が弾みました。また、1人1枚のスライドで近況報告をしてもらい、仕事に家族に頑張る同期の姿に自分も力がみなぎりました。その内容もさることながら、砂川くんが用意してくれたポリクリの時の班別ムービーが秀逸でした。会の最後は記念撮影と万歳三唱で終え、無事盛会となりました。二次会も楽しかったです。

また、開催前後には道後の温泉を頂き、終了後には懐かしの辛麺屋にみんなで行ったりと、久しぶりの愛媛も満喫できました。いいですね、同期って!

また5年後に必ず開催しましょう!!

最後に、幹事のりいちゃん、もえちゃん、りゅうたくん、ひでき、それからまめに連絡を取ってくれたたくさんの方の世話の皆さんの労あつてのものと、本当に感謝致しております。

重ねてみんなありがとう!!

そしてまた元気に5年後会いましょう!!

(文責 吉見健太郎)



2期生同期会 報告

平成30年8月25日に「2期生同期会」が多楽で開催され、県内はもとより県外からも参加が有り、合計27人で賑やかに行われました。63歳から長老の三好先生72歳まで様々な年齢層が集まりました。今回の豪雨で欠席となった人もいました。年相応の病気自慢から明日マラソンレースやテニスの早朝練習がある人まで様々な近況報告を行いました。年輪を重ねても「やんちゃな二期生」という雰囲気は変わらず、元気澆刺で日本の医療を担っていく意気込みが感じられました。今回出席出来なかった級友からのメッセージも読み上げられ、噂話や昔話にも花が咲きました。「来年は8月3日に開催しますので空けておいて下さい」と再会を約束しました。



(文責 松田正司)

第16回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

平成30年1月27日土曜日(毎年1月の第4土曜日開催)に私学会館アルカディア市ヶ谷にて、第16回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会を開催致しました。今回は第16回なので、第16期生が幹事となり、今井康博先生に司会進行を担当頂きました。



第一講演は愛媛大学臨床腫瘍学講座教授の薬師神芳洋同窓会会長より「がん治療と愛媛大学の今(昔)」。第二講演は愛媛大学眼科学教室の上甲武志准教授(16期生)により「網膜疾患の診断と治療-最新の進歩-」。第三講演は森之宮病院心臓外科の加藤雅明部長により「大動脈解離におけるパラダイムシフト」。全ての講演は心が洗われる、最先端の素晴らしい内容であり、母校の素晴らしさとノスタルジーが実感でき、参加者一同大満足でした。その後の懇親会も盛り上がりました。2次会の楽しいひと時を写真でお届けいたします。

一方、愛媛大学医学部同窓会東日本支部では、世代交代の時期となり、三代目会長にねりま健育会病院の酒向正春院長(9期生)が任命されました。今後の関東圏の世代間連携や、愛媛や全国支部との連携を強化するため、20期世代の西井鉄平先生(22期生：横浜市大附属市民医療センター呼吸器外科)が幹事長に任命され、政策担当は熊野正士参議院議員(13期生)、さらに、30期世代の伊藤淳哉先生(33期生：東京女子医科大学整形外科)と厚生労働省課長補佐の石丸文至先生(33期生)が若手統括担当に任命され、若手が集まり、良質な人脈と同窓生協力で助け合える学術・文化・芸術・スポーツ支援の集まりにしていきたいと思えます。



是非、関東圏にお越しの同窓生の皆さんは、毎年1月の第4土曜日に開催される東日本支部総会にご参加下さい。

(文責 酒向正春 9期生)

第15回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

皆さんお元気ですか。今年も愛媛大学医学部九州支部同窓会を7月28日ホテル日航福岡にて行いました。

今回の西日本豪雨では、被害の大きかった愛媛県内の野村町や大洲などで被災された方、また被災された中国四国地方の同窓生の方に対し、心からお見舞い申し上げます。

今年の同窓会は、25名と今までで最高数でした。わざわざ沖縄から参加していただきました小槻先生(4期生)、初参加の長崎県の一期生の鍛塚先生をはじめ、1期生から36期生まで幅広く多数お集まりいただきありがとうございます。皆元気で和気藹々とした雰囲気でした。



今回の講演は、『難しい骨折の診断』と『開学初期の思い出』の演題で多治見新造先生(2期生)をお願いしました。最初はまじめに講演されていましたが、後半は学生時代のおもしろいエピソードの話で、彼の人柄のよさがうかがわれました。

その後、写真撮影、懇親会となり近況報告も交えながら無事同窓会は終了し、ホテル内で二次会を行い来年の再会を誓いました。

来年は平成31年7月27日(土)18時30分よりホテル日航福岡にて開催予定です。

九州在住や九州に赴任された先生がおられましたら一人でも多く出席していただけるようご理解ご協力をお願いします。

愛大の各医局の先生で九州出身の方の参加も歓迎します。また研修医で九州勤務の方も参加よろしくをお願いします。

運営委員会の変更はなく下記の通りです。

支部長	角 典洋(2期生)
副支部長	澄井 敬成(8期生)
監事	立石 憲彦(7期生)
運営委員	中村 隆治(5期生)
運営委員	池田 文恵(19期生)

事務局

すまい婦人科クリニック	澄井 敬成(8期生)sumiic@k9.dion.ne.jp
九州支部長	角 典洋(2期生)sumi-clinic@mx2.tiki.ne.jp



愛媛大学医学部創設50周年に向けて - 中部・東海同窓会支部設立の呼びかけ -

愛媛大学医学部同窓の皆さん、ご無沙汰いたしております。

愛媛大学医学部も設立50周年を迎えるということですが、40周年記念式典がつい先日のように思い起されます。小生、平成10年に名古屋市立大学に赴任して、もう20年が経ちました。この度、新たに同窓会会長に就任された薬師神芳洋先生から、創設50周年に向けて中部・東海地区の同窓会支部を何としても設立していただきたいとの要望をいただきました。ご存知のように、東京(東日本)や大阪、中国、九州地区にはすでに同窓会支部が設立されています。毎年、活発な活動が同窓会誌に掲載されているのを見るにつけ気になっていました。愛知でも20年前に同窓会支部の設立を試みましたが、努力不足で頓挫した経緯があります。

ただ、今でも東海地区在住の卒業生には支部設立の要望はあり、お互い小グループで交流を行っているのが現状です。同窓会名簿を見ますと、何と愛知県にはすでに100名余の、また岐阜・三重を含めた東海3県には180名、静岡、新潟、長野、富山、石川、福井を含めた中部9県には約250名もの卒業生が各地で活躍されています。小生の所属する名古屋市立大学耳鼻咽喉科にも小生を含め6名の卒業生が在籍し、学内にも一昨年の秋に病態モデル学教室教授に就任した18期生の大石久史先生はじめ22期生の三井裕人先生(整形外科)、23期生の田中達也先生(外科)らが勤務しております。

愛媛大学医学部は昭和48年に新設医大・医学部として設立されましたが、50年経った現在、新設という呼称は払拭され、医学会においても研究や教育においてもランキングの高い大学になっています。そして、今後さらに発展し、全国展開するためには同窓会の充実と結束は重要です。そのためにも中部・東海地区の同窓会支部を設立しなければと、心新たにした次第です。中部・東海地区在住の卒業生の皆さん、愛媛大学医学部創設50周年に向け、支部会を設立しようではありませんか！

名古屋市立大学耳鼻咽喉・頭頸部外科 教授
名古屋市立東部医療センター 病院長 村上信五(2期生)



あとがき

7月の豪雨・災害の後に続く猛暑の中、この「後書き」を書いております。

被災地の皆様、お見舞い申し上げます。また、医学科同窓会の皆様におかれましては、今回の災害でご苦勞されていませんか？看護学科の同窓会からは、豪雨でお亡くなりになられた方がいると聞きます。この国に育つ事の厳しさを感じると共に、短い夏、鳴き続ける蝉の声に73年前の日本の惨事にも思いを巡らせます。

今年の同窓会誌では、新たに2つの試みをおこないました。

一つは、座談会と称し1期生の皆様(お忙しい中、県内でご活躍の、四宮博人先生、畠山隆雄先生、樫本真幸先生、森本武彦先生にご参加いただきました)にお集まりいただき、この40数年の医学部の歩みを語って頂きました。座談会で印象に残ったことがあります。当時1期生は、「君たちは大学病院のスタッフや教授になることを考えるな！」と教授陣から叱咤されたとお聞きしました。教官や学生はその黎明期に、「この医学部の発展と愛媛の医療の進展に、ただただ邁進していたのです。」そう4人の先生がおっしゃいました。心すべき一言だと思います。1期生は60歳中盤に差し掛かりつつあります。第一線でのお仕事から、人生第二幕でのご活躍が始まります。新たな心意気に加え、紙面では後輩や医学部への激励も頂いています。出来ればこの企画、来年は2期生、再来年は3期生と言うように、時代を下げていきたいと考えます。

2つ目は、医学部内のクラブ活動の様子を、現役学生からレポートして頂きました。ご記憶とと思います。2017年、愛媛大学医学部は西医体で総合優勝を勝ち得ました。この結果に貢献した(?)諸君に現在の活動状況を文章にしてもらいました。皆様方の当時とお比べください。隔世の感があると思われるか、当時と変わらないかと懐かしがられるか、様々かも知れません。今年のレポートは運動部だけになりましたが、次号では文化部も取り上げたいと考えています。

更に、昨年からはじめました卒業生の現状報告では、「がん哲学外来」で著名な樋野興夫先生(1期生:40周年講演会でも特別講演をお願いしました)、外務省医務官のお仕事で世界を飛びまわられた伊藤久雄先生(1期生)、更に、東日本支部同窓会総会での講演で感銘を受け、強引にお願いしました加藤雅明先生(5期生:大動脈ステントグラフトの国内第一人者)にご執筆頂きました。今後もお活躍の卒業生をレポートしていきたいと思います。

もう一つ今年行った重要な案件は、同窓会会則・細則・申し合わせ事項の変更です。この規約は1999年から20年近く変更が無く、時代に即しているとはとても言えません。これを、役員会での議事後、何とか最新版に変更しました。詳細は、別項をご参照ください。大きく変えた点は、①不明瞭だった会費の納入規則の制定、②会長・役員任期の明言、③同窓会地方支部への会長選挙権の委譲、です。特に③を通じ、愛媛県外在住の皆様方にも、この同窓会運営に広くご参加頂きたいと考えています。その意味で、愛媛大学医学部同窓会東海支部設立の決起文を、名古屋市立大学の村上信五先生(2期生)から頂きました。

さて、医学部は50周年に向けて準備を進めております。その前に、大々的な同窓会総会を、2019年8月第一週土曜日(8/3午後開催)に計画中です(毎年同窓会総会は8月第一週の土曜日開催する事にしました)。当日は、総会に引き続き、記念講演会、更に簡単な親睦会を開催し、その後おのおのの学年で、暑い夜の街に消えて頂く計画です。同窓会の皆様におかれましては、8月第一週の土曜日を合い言葉に、松山の地でお集まり頂きたいと考えています。どうか皆様、この日に予定を入れられないようお願いいたします。

今年も何とか第34号同窓会誌が完成しました。この同窓会誌を通じて、愛媛大学医学部同窓会が皆様方のよりどころになることを願っております。皆様方のさらなるご発展・ご健勝を祈念致します。最後に、発行にご尽力頂きました皆様に深謝申し上げます。有難うございました。

同窓会会長(第6代)薬師神 芳洋(愛媛大学医学部臨床腫瘍学:10期生)



《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 2年に1回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644
加入者名 愛媛大学医学部同窓会
入会金を含む終身会費5万円

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第35回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が8月第1土曜日に変更となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2019年8月3日(土) 16時～

場所：松山市内を計画中

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989 (受付10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

HP：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/